829
.M8 K65

湖月抄

梅かえ

37

Freer Gallery of Art
Washington, D. C.

7152

梅枝　細 巻ノ名以テ詞ヲ号ス之ヲ　河 巻ノ名薫物合ノ後宴ノかね梅がえをとりて梅がえをうたふ梅がえにて侍る事をとりてまうす也。細 源氏卅九歳正月のすゑ。孟 此二月のすゑまで

御裳着の事　細 明石中宮十二歳にてうちまゐりのあて、春宮も十二歳にて元服ありなれる也。おなじくまゐりたまふへくなるにや　河同義

あすからこたびかうぶりは　孟 御かうぶり元服也。いせ物がたりに叙爵のことゝいふは誤り也。漢ノ昭帝記にも元服とあり　河 冷泉院春宮時応和三年二月廿八日御元服　花鳥 冷泉院は朱雀院の皇子として十三歳にて御元服、天徳日のやうにもちひられぬ。冷泉院の二月の例を撰ぶ也

正月のつごもりなれば　御裳着は二月十一日なるを、まへにて此月そのまへの事也。

大弐　細 大宰ノ大弐ハ一任五ケ年までつとめ

御もぎのことおぼしいそぐ御こゝろおきて（源氏の御身也）よのつねならず。（孟 一段にまゐり給ふ）春宮も同じ二月に（細 今上の春宮十二歳にて）御かうぶりのことあるべければ。やがて御まゐりもうちつゞくべきにや。（明石姫君の事也）正月のつごもりなれば。おほやけわたくしのどやかなるころほひに。（細 公私）薫物あはせ給ふ。大弐の奉れる香ども御らんずるに。なをいにしへのにはおとりてやあらんとおぼして。（源のこと）（細 彼浅の香具へた）二条院の御くらあけさせ給ひて。（六条院へ）（香具ハつまり及びもとこ）からの物どもとりわたさせ給ひて。御らんじくらぶるに。にしきあやなども。猶ふるきものこそなつかしうこまやかにはありけれ（孟 こちらのはちどもの）（御入内のようゐのこと）とて。ちかき御しつらひの。ものゝおほひ。（唐物）

なしぶれハ渋紙の表に有る大紋まてハあらへがくれざるもとも付なれのらへ文義こと
わかし。三光自筆ハ細字に書也。大紋ハ必潤色なれ故ニ御みやげとなるものなれバ
潤すり。江帥匡房の御みやげまで学寮の十哲図とまくれきうく

細
金襴ありのれ丸
ひどんさ
あり。明 被今綺と書り
河 緋金錦 金を織付る
綿之金襴のれ丸

細
二ふきつ
さゝうらて薫物を合せ
まかなり。孟 二種窓に潤
合之
肉あるともも 裳忌の
用ミつてに禄をて六条院の
肉あるもかあるもいとるき
まかし

河 端之 縁之
ふる物ともねるどりのくしかよ古今の此世の
そどめりてさとより 細 源鴻臚館ありくおせし時ちとし物共あるや
わかしのさそまうれりけり。
あやひどんさ先なぞ。今の世乃物よ似ども紅さ
河 其物くハ似合あるやうに河瓊入しけるもゆ
ぐれんしあてつぐそゆせのそてこのさ
細 大弐の乳
細 沈香之
紅り新添の物之
びのあやうしそりのるどハへてよ縫りてそうらど
河 沈香ハりまてハあるべりをぶろうれ
をハ昔今のとりゐるべきをすそてれうこぐ
女中方へも
よをりをうせ縫あさくさづきあそをゝさ
裳忌の用ミつくし
せまへとくてさせしまへ里。ぞくろ物上に達
アのろくあど世よるてさ肉よ肉あつとそきよ
女中方へも
をえめげくつとるそまかるをへてうざくよ

河 織白 香細
うゐりるて
鴇背和供入織臼鴇五百
枡さく葬山太平観記
そうもの孟 兼和之ぞ
ゑうりとよしぐし。細 仁明
天皇之本捌 ころくくり。
河古本ハ大略そむかり
どおり。顚源ねそゑさ
そうしもと展轉写字の誤
紀ぞぐぞくもと兼和菊
とりふ叙有り此物ぐう
すもも大宗を大ぞくもとり
ぞり。愚案 紀そうしも
ゐ此いおしめと書づき
兎 兆 そうしもとそん
ようしと展満書写の謬
るもへしと海海よりる
強ハ花し。和の字をとも
の草字ありうきそその
のうち文王をよくうろうせろうろ
べしぞうしとそんとよきを
ようるハ此物さうりよれ
孫を此ぞうしと共さり兼
の字をそんとよめるハ文

そらくのへてがるちものとうりし
孟 源之
さころあり。ゆらぐハさん蔵よそるれおりし
おしてそうもの此りまりしめのあそい乃
わうをよいそうれるこよはつてくまうひきそん。
細一段と執しるよ之
くるよちらく合すふぐへとそひんがしのあうの
細 裳上之
そるりらひぞくよは志うつしひゝきるよありちぐ
なさせすふて。八条の式部への此はうをつさ
河 秘
へてぐさよいどくあつをまふほどいつしう
ひしまへぐよわりひのみまきあさくも勝負乃
源
さどめあるべしと共とぐのまふ人の此おや
かさない 其弟子ともに
けるきさ此ありそうひらろうるあり。いづてさみをと
孟 燻物を秘せらるく ちよさうかへ人へとさねな
おもへよさるゝふ人あひうくすなるるぎ此てきへ

きざみのまゝなるを八承和とうるべきなり。承和ハ仁明天皇の年号
し二ツのわざとりへハ黒方と侍従との二ツと 細 黒方侍従ハ不傳男とりて割禁するよといへども源氏の
御心にしめてあはせ給へり
しんでんとうふゝんとき 哢 孟同意
とをざかりて 細 花宴よ委し。不登ハ西方よ小寝殿(コシンデン)あり母屋の中とあり
御様をうつりの母屋の中をとあり。御格子ひきとゞめてといふとも晴の所と。花紋出ハ
母屋と梅おもてに東の中の放出とハ東乃対の母屋也。中とりてハ母屋と東西の廂との名に
障子をよそくつゞてられぞ御様とそこらの所を中の放出となりける 畧記と
御志つらひくしてふかう 孟 只ゐ様を中にまつそくうろし。ようさりのそ秘しうまするれた
かうくせうらしと
八条式部卿 細 [illegible]まうんくう。ハ本康(モトヤス)親王一品式部卿 号二八条宮一仁明天皇第七御子なる名薫物合也
○黒方 沉 四両 丁子 二両 甲 一両 薫陸 二両 欝金 二両
○侍従 沉 四両 丁子 二両 甲 一両 麝香 二分 薫 二分 甘松 二分 件二方故八条宮方と
花 八条式部卿本康親王ハ仁明天皇の第五子。母ハ従四位上滋野(シゲノ)温子参議貞主の女也。源氏の合
せたる方と紫の方とをよ侍従黒方と。八条式部卿ハ紫上の父式部卿宮におゝくへてとる
又兵部卿方ハ不傳男ニと。承和の帝の方いまめの方まの世 これハ紫上のを正流とすべ
きにより下源氏の合絡を較とのらしていらで此事よ侍べりかゝとそのせくぞり 畧記
あはひのかゝき 細 源と紫上も同方を調合あるし。勝劣をよう何べきとぞ 哢あるく
ド方よ加減のあるへく
人のおやげなき 細 紫上ハ源の御子のごとくなるのひしるまし 師 [illegible]
釈ともあるハしきさ
どもゝそこらのきよらをつくし給へる中
かうごの[illegible]ともの[illegible]
孟 香壺箱ならじ諸道の御事也。
にも。かうごのはこどものやう。つぼの 細 御厨子のまゝすのと 細 かうごこの香壺の箱也

三

花 二番 花 母屋の調度東
西厨子(ヅシ) 小箱(ハコ)八合あり。そ
中二合八香壺の箱也。東
の厨子のうへよとく二合よ
義壺にて入て。梅花等
の種々の薫物雲母壺を
の中よおりとぞそりき
らく八銀(ギン)盤(バン)よ用之。伏のう
べまとうへよあふぐへし 縣と
おくのかうを沈ろうしたるん
細 白ひの香くれよう。を
すそへいまんとも

ひとりのこゝろばへもめなれぬさまにいま
めかしう。やうかへさせ給へるにところ〴〵 孟 めづらしうやうかはりてうるはしうと
のこゝろをつくし給へらん匂ひどものすぐれ
たらんどもを。かぎあはせていれんとおぼ まくまうとよるの人いまんとも
すなりけり。二月の十日。雨すこしふりて御前ちかき
き紅梅さかりに。色も香もにるものなき 細 螢の宮也
程に。兵部卿宮わたり給へり。御いそ 細 [illegible]
ぎの今日あすになりにけることゝて
のよしにてとぶらひきこ 細 源と宮との事也
え給ふ。むかしよりとりわきたる御中なればへ
だてなくそのことかのことゝきこえあはせ給ひ
てあそて。花をめでつゝおはするほど 細 槿之 孟 前の斎院也
前斎院よりとて。ちりすぎたる梅の枝に 孟 前斎院也

付たる御文もてまいれり。宮きこしめす
事もあれば、いかなる御せうそこのすゝみ
まいれるにかとて、おかしとおぼしたれば、
ほゝゑみて、いとなれ〳〵しきこときこえつけ
たりしを、まめやかにいそぎものし
給へるなめりとて、御文はひきかくし給ひつ。ぢん
のはこにるりのつき二つすへて、おほきに
まろがしつゝいれ給へり。心ば
こんるりには五葉の枝、しろきには梅をゑりて、
くひきむすびたるいとのさまも、なよび
かになまめかしうぞし給へるの
[illegible]なるさまにて、御めとゞめ給へるに

細 源の心をけ[illegible] 孟 [illegible]の御こと 細 源之 細 薫物調合のことゝり[illegible] 抄 前斎院の心[illegible]調合[illegible] 離或撰 細 [illegible]の文句

ぢんのはこにるりのつき二[illegible]
[illegible] 抄 [illegible]
[illegible]
に二種の[illegible]
[illegible] 唐 [illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]松[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
の名をとは松の枝につけ、白きりの名を[illegible]白梅の枝に付たるへし。下署 花 [illegible]の枝と梅
に折枝のやうに[illegible]そえられたる[illegible]。一説云、紅白の花乃中に白梅を撰て付たるを
馬索 離撰或説の中 離を用へし。細流 [illegible]折枝の[illegible]
[illegible]
花の香ハ 細 [illegible]合せ[illegible]
薫物[illegible]白[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

孟 斎院御歌
花の香はちりにし枝にとまらねど
うつらん袖にあさくしまめや
ほのかなるを御らんじつけて、宮はこと〳〵しうずし
給ふ。[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

抄 [illegible] 孟 夕霧の[illegible] 源の返 孟 [illegible] 孟 [illegible] 細 源の[illegible]

うへ女のさうがくハ書かう
らさぬえぬみぐく
此秋のつゆぞよ　花源の案
の次よ秋流への此花有
と書て答ク々文よ見
せりされぐうし　孟日
秋のえよ　扨らし風流と
つまぜらうし　師人の
しらめんりくれ源氏の
新作へのけさうと云人
て云り秋流への心ぞし
そ源の人めとつくしむ
ころくぐとく西国を案
抽の梅むよりけてもいゞ
秋のて秋流よこそむると
のゝて同様花らうる
べうりおりしより人のと
ぐむ香はそべ忘こりく
まうつありしよりそこ
とやわりつん　嗟　花ク文
孟葉末流之師あクて子源
のくしえへハそくしとを
かくらうや杖わりつんと
案ふ以流よ　こんひのて々訶く

冬ゆらんで雨ぐしくし猿かけしらぬそらら
しぐれとては秋のつゆぐよ
それのえよいつくらろと忘むけられ人
のどろめんりとばつてめとしそやありつん。ま
めやうまハもとさぐくさこさ猿こされども
わる人色めさんまて。これを以てしりのいと
すとうあれしと忘すすへすしてわんいとくろよ
くろれバうらしさ人ともこそくいとさう
けぞまよりそてさとなりてとおもふ家。まつく
ちくさ何とよるれ皆をしくらまんびとそつりしさ
所のこうらおいうつうこやよるれバをまりくしく
よめつ更かくことをなりんらとおげるくて

まあやつよ　細　源の詞とうく葉柳おりせるみとむく
師走ハ源の一子ようそてあきばくしけりとくし
いとえみすくそれだ　細　源の早下の詞と以のえ姫妄別もとみすくう
ちひて勝ゆひのろうと秋ぬへゆとくし
あえりのも　孟　あやうり柚
とうみく秋ぬハ秋ぐ文女
此よそておりさしげもそてよ
申衣すすでありせまへでもや
り柚かくのるまし
ことらりゆのよ　孟　源の
ゆるみ程うりくりくし
られうせまへ　細　源の袖ハ
葉柚の勝者とまらせまし
こし
これみうえせん　孟　武える
らぐく派みらへせんの色
ちうへ小もあくらぐや
細　文ども春ども知人
ぞ知し派ゆうらせんの
詞よろくわり
いひみうね句ひそものそく
ミとうれさうらひとうさ案ら。

うんありもとこそて源氏わえりのとけよ葬場切
まへぐきことそりそうしいことそうゆ経こ
のつうぐよれいとくのあさせ源氏だらのく
れつうひしそ。以文葉の忘あうようでらんと
吟しまつれバさ浪ぐくわりしうまらすてをれ
まらそれうりせまへぐれよろくこんとまこ
えなそ此ひうりだめしくへさせ源氏
人ふもあくじやとひぐしまへども以えうね
句ひ花のもくこことうれさうぐ。一のさるあどらぬ
いとくのしぐみをわさまみすく。あれぶらゑよと

細 其中よりえらび一種のまさりをみさだめてかくてこれはきく人ゝく〳〵ふかくなれ
どもこのみ抄し師とくこゝとされなくこゝろにあらくるくんと合せ給へり。細く
合せ給ふべし 抄 当り世の人の御もあらそひやと早下し給ふ。薫物と
らく承和のかひてつひあらそひすぐれたり白ひとものゝ中に是れハ流にまさると
下よりとられたる也。是其一くさてのいさゝかのかどもわきまへの事ことし合せ薫物
の一種まさくハ是し。是其の一種をし給くべ一くさ事ことゞのましくにしるし

とりましめのふたつのかたをいかで 孟 保の合まじて全
承和まで候不用侍おまり
かくらのハ今そとしてさも給ひけん 抄 さ今源ハ承和の方也
のみはなの迎ますどしへて かしのまこ
八条式部卿も承和の方なるの下也
東のあさしりいづ。こくさハらう御事と
まへるを。惟光の宰相の子の御事あり 細 しるまさ宰相の子
これミつ
て来れり宰相中将とりそへつ。 夕霧也し
おもての御こゝろ々ありての事て
給ふや。いとうるしきそんざふもおもりて
侍りみいと。みさしやと。まやと給ひ。し
細 みなもとの君方をさと合川のまつり
かりてそいづくみもちりつひろくべう

ちよ子の院のとく〳〵なくよ
上 兼和ノ例おまへしよう。
承和の御河右近の陣
の御溝の辺の地にうづ
まる。後代桐侍して。そ
南とうらへどもらし花 薫
物と理也。源ともられど
梅花ハ梅のかりし。菊花ハ
菊のかりもまもるとさ給
とまり
これミつの宰相 細 惟光来
様よ但そしるの宰子始
てたとふ。

人々の心々よあはせ給へる
かうさわさくと 師 侍従
黒方いづれもとこれかりハ
めづらし方なれども源く
まちとつくさ人の宰相
まよりてが蔵あつにわ
でさうらの御あつし
さりへど 細 源と紫上
も黒方と合せ給へり
どを宮いづれもりうも志
づやうるうけのあてど
ぐれさうことく。黒方のふ
まいやうよあらへ志る
ともそしてさ一種の家う
いふつかふ 紀
あぶるるつまかひ
牡丹も読む 志うるのあるる雨も
さく〳〵ちすうけるまかひ
ちうくにし
侍従ハ御そぐの此八 細 侍従
ハおもせ世のふ人くともれ
ども中もて源のむぐ
まくちうとく
ミらさわる中に 細 梅花と

めづらしへくのんぐよ合給つる。かくさあらう
をさきあたるをまぜるよいとけうあるこ
みわりさだまるにいづれ先ならむ中に。鉄漿
いまともむまきとハ先どくど
のれくろばうくさいへども心にくゝよ
うつろう匂ひことなり。侍従ハ 源氏 孟 細
薫物ハといふべきを略せり
をとゞのハすぐれてなまめかしうなつかし
孟 紫上又侍従黒方梅花三種也
とさだめ給。たいの上の御ハ三くさある中
すい 全
よ梅花やうよいまめかしうすこしは
やきこゝろしらひをそへて。めづらしき
細 梅花ハなれ也 孟 梅也 源
かをりくはゝれり。このごろの風にたぐ
まじろへて
んにはさらにこれにまさるにほひあらじ
抄 花ちる里也
とめで給。夏の御かたには。人々の心々

らへて〻将へ之奉の御ぐるまよせて梅花を持まゐりたまふ
さかきくいなそへて 孟白のもくこらうし本 白ひのうすやうよおりやうるみ
河梅花方 沈香八両二分 占唐一分二朱 甲香三両一分 甘松一分 白檀三分二朱 丁子二分 藿香一朱
以上十五両三分 寛敬僧都か説去ハ丁子か替ありべしとみへたりへうの香を
うちへゐりしに出をやと
所作修ま方ハみなるべく
まあらそひあふまれども
を殺ましもくもちすび
ごとしとて荷葉と一種
合称之嫌ともんそひき
久しえるといふ四面白き
花散里のまらいりよ齢
故かうさんそとぞうら
えふいちの葉抱たり
何此詞妖艶附に正註數
其功類 荷葉方
甘松一分 沈七両三分 甲二両二分
白檀 朱一二朱 熟欝金二分代
藿香四朱或二朱 丁子二両二分
或安息香一分一説二両二分 以上十三両
二分ヲ天慶六年二月廿一日
甲斐守公忠朝臣所献之
細 梅花荷葉共羽花落葉
何くだりしれ者

よいとこし結る中よふとつくかをし出を
やとまぜ嫌ともんむひさえあるかに
荷葉ふと一ろき合ありたかうら
うあろうして。哀よあうじ。その此方にも。
附しよまれるあかひのさどまれる
んとあいなしと見て、ふそのみえ
うもぐれるハさらの朱雀院のまゝ 河花細嘆孟崇兼平らく
慶の帝などの移させまるうたせあつて公忠の綱臣のよくしよえてし 所延喜よりを
まつわりし。百姫の方ゐどといへそよ 細 おのもそれゐり
めぐそ、偏めしさとりあ あいなしとものいふそ

などへ附よあひつくへくさとあらせまかべきさとそ聊敬あらあら所 御前上の事〳〵附とく
ましんわうとハ去夜の此方に梅花荷葉などを合せたまへハその此方ハ荷葉さるべきさと
さびすれわるやうに合おて。白ひのくもつもさうくびゃくさうんとんづうつひしく
まれのもとさく院 細 旧記などよい宇多御門也。此物語にては、花名の御みくろり
紀此院わきさのみあり。一よハ前ハ朱雀院ハ兼平御門也るし。公忠朝臣夫君御撰を其代よ
つたへて、合香よ達者ぶりんて。故よ朱雀院の薫衣香ハ則公忠朝臣の奉わつる方と同し
るまし。百歩方とハ凡香竊粉のごとくくだくるもりとりて百歩香とハいふべし。一方に定べからず。然に一よハ
朱雀院の薫衣香と公忠朝臣百歩香と二種を明ら上の合をあらそひしこと。一百歩香
ハ臣家大閤云る。公忠朝臣なにらあるりしみえくされど。兼平の百歩香と名づけ侍れバ
方かれバ公忠朝臣あらんとしもうるふ秘くしれど思えてよ云細ハ梅花荷葉なと
とふしうしなバは二の方を明ん上さひかしておろ仕まつるを思えてといへる。前の朱雀
院ハ兼平帝のゆうなく西宮抄ニ陰時部ニ云ク前朱雀院初テ大臣ヲ之時楽
此朱雀院ハ宇多御門ならく兼平帝内門と朱雀院とうよはせて宇多天皇を前の院
加へて申給ゆ此物語よ朱雀院あし海を思よりて兼平帝の御門とあのしたしこの此
薫抱方などもなりしなること請さきのの朱雀院古今集に朱雀院とありハ宇多院也
さきの朱雀院も寛平の此るゆしうべき事。然ども此物語の朱雀院より
又兼平の御代合香とすましめあうりとえくらう。公忠朝臣号滋野井弁
従四位下光孝天皇御孫右大弁国紀… 薫物合に好手しられ。延長天慶間右大弁
忠朝臣… 人不小舎人大和常陸相並奉ニ合香之役ヲ

は不正悪
心ことそそもぐられうといづれともしとく 細 源の相紙とも指定のくくわう
すぐもそきとめ結をどうろぞさうるうさ 判 なん

月さし出ぬれバ　花上の詞に二月十日とあり。河海ニ花朝とする也

殿上人共　河　殿上人ハ殿上に召
細　六条院の殿上に　師説　桃花に遊事ありまわり殿上のひとのみを布衣にて
随て殿上人共といふ也　下の者を舎人共と

けさんはかりにて
細　見参とて名記の奏をうけて　眺　蒙恩乃礼を申入奉とハ今日雅楽まりうとて交名なと注してさし入てまつる也
蒙恩なとをもいふ事あり

月さし出ぬれハ大みき
なとまゐりて昔の御物語なとし給ふかすめる
月のかけこゝろにくきを雨のなこりの風すこし
ふきて花の香なつかしきに御殿のあたり
いひしらすにほひみちて人の御心ちいとえん
なり。蔵人所のかたにもあすの御あそひの
うちならしに御ことゝものさうそくなとして
殿上人なとあまたまゐりておかしき笛の
ねとも聞ゆ。内の大殿の頭中将弁少将なとも
けさんはかりにてまかつるをとゝめさせ給て
御ことゝもめす。宮の御前に琵琶おとゝに
さうの御ことまゐりて頭中将和琴給はりて

梅か枝
河　梅枝　催馬楽呂哥
入梅か枝にきゐるうくひす春かけてなけともいまた雪ハふりつゝ　二段下略

鶯の　細　僅る春の梅かえをうらひしよ感しておもく
つゝめうたと八葉抄ニ云
とおもふむつみことし所さらすとふしめつる花の
あたりにいとゝ詠曲ニやかゝれんとし　細
千代もへぬへし　花しる

はなやかにかきたてたるほといとおもしろく
聞ゆ。宰相中将横笛ふき給。をりにあひたる調子
くもゐとほるはかりふきたてたり。弁少将
拍子とりて梅か枝いたしたるほといとをかし。
わらはにて韻ふたきのをりたかさこうたひし
君なり。宮もおとゝもさしいらへし給て
こと〳〵しからぬものからをかしき夜の
御あそひなり。御かはらけまいるに宮
うくひすのこゑにやいとゝあくかれん心しめつる
花のあたりに千代もへぬへしときこえ
給へは

どハのらく祝の称ありよ
依て山猫さらあり
何以まで〳〵地迦よ仏の
めぐれん花しらぞ
いらまきしへ久し
ともうも　細 源の許くば
わかりと蹈ど田粉念之
盃うれどもわかれとハ
うしども洛書伝わらべ
海見せんとく
常の　細 秋中ねの峯ね中
ねよみすしそ笛竹と
情うし。盃夕霧の笛とや
りそのらし
山ありて風のうぐう
細 吹とをせと云とうけり。
花風ぶふしらてうぬ
花と浪やうるへきとあり。
峯ね中将うが横笛吹。う
とよかりさて下の句よ情
あくとハクタト
霞ぶよ　細 秋の明重ハ為
いふげよるくものかり。
されバ霞ぶよすくハ秋の

源 冬も香をとうかぐらりよこの気ハうれ（冬うも香ふてやむうろうふと）
さくやどとかれどもとわくらん歌中ねよ雨（柏木よ盃とうらで）
へんどりて峯ね中将よらす（夕霧つし）
柏木 常のねぐしの夜もすびくまでる代
あささとをせよけの笛しけ。峯ね中ね
夕霧 山ありて風のよじめうられの木よとうり
あくぬまでうさやよろべき。情すくとられ秋（細 今こ花のうの情か）
うしひ給。弁ノかね（しとぞとし）（柏木の弟こ）
柏ノ弁 霞ぶよ月と花とを下そどハねぐしなる
とほころびすまじきましとよぬぐるよ聲しぞ。（盃 東の山くゆろうと）（細 此等とうけぶくし）
文くり給れをくり袖よ。ぶうしの流まう（盃 若アノ文へ判之の礼摺うり）（源の流名姫之）
のれうすやし乃れりもそひ一くずりてかれ（細 いまこ花も只盃害）（文れ）

明さうしと云ひて為もんよげよかくろめぐきそく
し。弁かね柿ぶ気どらふよつきて。給くらの為も分ころびるましとよりう
荊の斉たよ八順じども。云唱のことをとあらくぶそ下句よ秘よ明らくとハうり
花の香をと　柏 花の香ハ薫
柚こえうすしぬ袖ハうで
落らぬこ。源のとうりの袈裟
楽がこて風流めきさう
と姉やとらめんとよあう
面白し
めづらしと　お 或枕御疾よ
御斉に姉やとらめん
とあるぞうやさハあるま
じ。此花の御とまそ
かうことめづらしさこそ
古て人ハおりとれめとあ
そびとく 細 花の下のうする
れバ花の師とうれ。姉や
とらめんとみるとすぐさ
めてよめらし　お 此時之ま
行の山方ハおすしられども文
の姉やとらめんとあるをハ
しうれバ誰してもとさし

ぬ焼物二川がそへて此車よやすらせまふ家（しき）
哀 花の句をえうすしぬ袖よらりしそことわ
やまりといりやとらめんとあれバこうしき（細 扇しうりと姉）
あうやしワうひ給れ東らく沿ほとよぞひて（やとらめんと為をとうひまで）（細 車に牛をかくる程之をかくる）
源 めづらしと有て人も侍ぶらんそれのみでさ（多きこ）
とさそ人る気に見るきこしばかるらんとあ（源の句）（細 盃お 見役あり）
れバ。ワしワらうしらり給。つぎくの気ぞら（お 文の係し）（比）
みもとくしうしねさ海よ頂そんらんぶこ
うちさるとうけさせあやうくて西のた
とぶよいぬの河よワらり給。文めのおふしかます（細 秋ぬの押の前く）（明石姫君の常気の前く）（中らた）

て云人も侍らんとてかくいへるにや。御ぐしあげの内侍は髪をあげ奉る人也　細　秋好中宮と紫上と御対面し給ふ事也　一夜の夜がれもなかれよとぞ云るにや
人のまゝにうけ給へるにや
細　御ぐしあげの内侍
内侍といふ人也。御ぐしあぐる役なるべし
師説に内侍は掌侍なるべし。内侍の役也
人もこのついでに
師説に中宮に紫上対面し給ふ

にしのはなちいでをしつらひて、御ぐしあげの
ないしなども、やがてこなたにまいれり。うへ
もこのついでに、中宮に御たいめんあり。御かた
〴〵の女房、をしあはせたる、かずしらず見
えたり。ねの時に御もたてまつる。おほとなぶら
ほのかなれど、御けはひいとめでたしと
宮は見たてまつれ給ふ。おとゞ、おぼしすつまじきを
たのみにて、なめげなるすがたを、すゝみ御らん
ぜられ侍るなり。のちのよのためしにやと、心
せばくしのびおもひ給ふるなどきこえ給ふ。

宮、いかなるべき事ともおもう給へわき
まへざりけるを、かうこと〴〵しうとりなさせ給
ふになん、中々心おかれぬべくとの給ひけつほ
どの御けはひ、いとわかく、あいぎやうづき
たるに、おとゞも、おぼすさまにおかしき御
けはひどもの、さしつどひ給へるを、あはひめ
でたくおぼさる。母君の、かゝるおりだに
え見奉らぬを、いみじと思へりしも心ぐる
しうて、まうのぼらせやせましとおぼせど、人の
ものいひをつゝみて、すぐし給つ。かゝる所の
ぎしきは、よろしきにだに、いとことおほくうるさきを、
かたはしばかり、例のしどけなくまねばんも

まうらたまふるとも
孟　源のおほやけ思ふ心さ
しなき中宮の方
細　大方のこと
師説に中宮の
(細　中宮の詞／細　源の思す繁昌なること／細　明石上のこと／細　紫式部が筆也)

冠者の御元服　哢 朱雀
院の御子の御中元服よ一
第の御子より元服 水尾
可見

ひきいれしてとは冠をきする
孟 加冠中宮をまつる
ぜんじやうれば冠し掛
秘抄 ひ ゆひさす
とに恩萌 もとのゆひ
するを髪本の如くしてさし
きにしきへさうし
かのゆくしたる也
孟 此かたの心は青表
紙よ被除て系図よは
呉夫よむきとあなしん
とあり人
つぎくにてとあり　秘
花もちまちも御み姫君へ
内わりてつぎつぎくり
あらそんと近川しまうと

かくしやとてと御うなうくしど十二にて御元服し給ふ
え服は女より日の御よそほひきよらかりしいとき
よしくかりしを見人のむすめどもとさ
ひまつりそでさいとよく御ぐしあげ給へ
ど此殿の御かしらさげすさ御のいとこしく
ばかりしてやすからんと左の中将
たまひどもかがしとくまつりしとこそ
めでいとらうくしきに御代の
すらはおまさおる中よすこしのけしき
いどまんしそ思ひすれそうしのらや
うさくの姫君のひさこあられ給ひた
くんおくじよのあひてれ給ひのひめ

くはしくはそのことかりとおぼえて
すづれとはれ女入内し
右大臣殿の二の君　御息は
御づりこの是によ後涼殿
の女御とおもひ弘徽殿
すや源手中で後のすめ
られは後つぎいよいより
まうしや

四月よりしこめ女せらる
拾芥抄 四月八太子言例 陽明門
院 万寿四年四月十二日入
太子宮年十五

めでたき御めぐりとよろうしいとらくん
どよろよろしてまそて右大臣殿のとりち
系まぬ藤景殿といふしものこの御りくいとむり
しの御よめのおもとけいさをわしめあ
らひくおきりのひめとふやかも
とるうしせまへで四月みとさきめ
れてぞうどもとひりとあかりさくの
御ぶうしも御のささやうるとと
おらんしいれてもくれさうみらく
どとめあかめて御まことうさとのへ
さとむきうしのことともよいろべさきさ
しのやかくなみも思のよべきとえて

かんなのみなん 師かんなハ
いときなくなりたる
今よりさきのかんなよりまさりたる也
花今の世の仮名ハ弘法大師
作之いろはの仮名ハ日本紀万葉
の前にあれどもさだかならず日本
紀の仮名ハ一字一音万葉集
ハ以音与訓与義書之
ふるき跡は 細昔ハ真行
草をかりて今のやう
にはなき也
ひろき心 細一筋よりて
あり上古ともかよひて
とよりて 花あなたよりて
奥義を書きあらはす人
こよりハかくと思ふ也
てのこし
まんなしとかきなれて 師源氏

給ふ。よろづの事むかしにはおとりざまに
あさくなりゆく世のすゑなれど、かんなの
みなん今の世はいときはなくなりたる。ふるき
ざまにあさくなりゆく世のすゑなれどかんな
のみなん今の世はいときはなくなりたる。ふる
きあとはさだまれるやうにはあれど、ひろき
心ゆたかならず、一すぢにかよひてなんあり
ける。たへにおかしき事はとよりてこそかき
いづる人々ありけれど、女でを心に入て
ならひしさかりに、こともなき手本おほく
つどへたりし中に、中宮の母宮す所の心
にもいれずはしりかい給へりし一

のうち御ゆゑをのせて女
手にて一くだりあり
ことによき 孟際殊なる
ひろく見ゆへしといふ心也
御息所の御手を源の心を
ゆへありと見給ふと云
事也
さしとおもひきこえし
細秋好の御かたへの
なき人の心をかけ給へるよ
浅き筆の上にくらへて見せ
師御息所ハ源よりも
源の心をかけしと梅をまたと
源ハさいとこゝろしとも
さまにくらへて 孟法皇
宮の御手ハまさりて秋好
と思ふし源の御心ざし
こまかにをかしきなり
も紙をいれてかゝれ
まさき御ありて自ひぞ
まくなうりし 細
御花つまさ手ハ自ひ
がありし
尚曲といふ

くだりばかりわざとならぬをえて、きは 孟若也し
ことにおぼえしはや。さてあるまじき御
名もたてきこえしぞかし。くやしき
ことに思ひしみ給へりしかど、さしも
あらざりけり。宮にかくうしろみつかう
まつる事を、こゝろふかうおはせしかば、
なきみかげにもみなをし給ふらん。
宮の御てはこまかにおかしげなれど、かど
やをくれたらんと、うちさゝめきて聞え給ふ。
故入道の宮の御ては、いとけしきふかう
なまめきたるすぢはありしかど、よはき
ところありて、にほひぞすくなかりし。院の内侍のかみこそ

[illegible]
にくらべて猶すぐれたる事をのたまふ也
かなの事 細 [illegible]

まんなのすゝみたるほどに 細 此段の趣意は、[illegible] 今の世の人の書 [illegible] 仮名は [illegible]

さ。今の世はいときはなくなりたる。ふるきあとは、さだまれるやうにはあれど、ひろき心ゆたかならず、ひとすぢにかよひてなんありける。たへにをかしき事は、とよりてこそかきいづる人々ありけれど、女手を心にいれてならひしさかりに、こともなき手本おほくつどへたりし中に、中宮のはゝみやす所の、心にもいれずはしりかい給へりし一くだりばかり、わざとならぬをえて、きはことにおぼえしはや。

(細 勝月(?)之 細 業上之 細 業上個盃(?)に書の中へ 細 浮舟(?)之 細 [illegible] 花 書損とも反紙ともいふ 細 業上)

とて、まだかゝぬさうしどもつくりくはへて、表紙ひもなどいみじうせさせ給ふ。

[illegible]
花 [illegible] 細 女手 [illegible] 盃 [illegible] 河 覆中(カヘサイニウス) 細 [illegible]
進まうもあるをいふ也
葦手(アシデ) 細 [illegible] 絵の中に文字を [illegible] 或註 下絵 [illegible]

兵部卿の宮、左衛門督などのにものせん。みづから一よろひはかくべし。けしきばみいますがりとも、えかきならべじやと、われぼめをし給ふ。墨筆ならびなくえりいでて、例のところどころに、たゞならぬ御せうそこあれば、人々かたき事におぼして、かへさひ申給ふもあれば、まめやかにきこえ給ふ。こまのかみのうすやうだちたるが、せめてなまめかしきを、このものこのみするわかき人々こゝろみんとて、宰相中将、式部卿の宮の兵衛督、内のおほ殿の頭中将などに、あしでうたゑを、おもひおもひにかけとのたまへば、みな心々にいどむべかめり。

(細 不入系譜 花 一双ハ草子二帖也 河 自讃之 盃 源の語を勤て [illegible] 花 撰ひすぐれたるを [illegible] 盃 夕霧之 花 柏木 細 業上の兄 [illegible])

六経とハやとらへ八まんと思ふよりきさらぎといふに勝を出ぬといふに荷を経まくしく花の
での名なとハ昔の筆の中に文字をかくし。石畳などのかたちにも書なすなり。中峯和尚の
笹の葉がきといふ文字の神像の筆ふに似たるかとなり

さくらもそのも
師いづれもかるのるくし。
さくらハ蕾しらなみも行と
まあり。ぐらのとハ着通
のうるかや。おさくの上ハ
行の字気女手ハ今の世
の仮名也
いみじきやなしと云り。女房
にいかしらぬ
花山おさまに御二三人の
女房に着くいかる
るなど有なるり

源 細 茎橘合をよめる也

かかり。例のえん殿にまゐりければ。おりまして

おゝ三月末より四月のついたちころ也

ころおほひ。花ざかりすぎて。桜ともいひがたう

宮うらくうなるに。ふるまさへくも所どく

ひすまして。法師のもりござりさうのを

さらのも。女でをいとゞうるさうて。給ふ

ねうばう

おほん人に示づけしも。女房二三人ばかり

孟 そ文字は清し

すぐなどしをとまそでゆへおかむさ。集

のおるなどいづるよぞや。などえう出ありく

くらおしかぬ限さふるぬ。こすすかげさき

源氏の称也

しそ。けうそくのかへりよをさし出しけれ

そらえんなるひらハ
両端鶴寫あらハ枝に
書ひらハ紙の両面に。色紙ハ
白き色やうなど云くそく
書き紙のうらくわざやうに
見ゆるし。細。白き赤き
ひらハ鶴にしまうけ
法るとしてそのまり
お直衣すぐにうつくしく者
おまいしまふるもの以ふも
直衣を着あそぬよそへ
おぼへさうして
流 おとるりまつりさへ
細源ハおまり前と後え
るもうぐしげそて女房を
ありふとそう
うらうしこまりて
孟源の見解とよく礼義
と正して含ひもまふて
ふひよ優艶の称也

ちくいらさぐれて。筆のえりもちゐく

細 唐の紙也

おひめぐらしまへるさ御。おくよおくめでて

しゐろきあかくさるをくらゐえんなるひく

ハ蕾となりるとししようりしかくるき御さへ

しらんひといげよめでぬべきされあるさ御

細 薄葉紙を云物して折りて結り結也

源

おり。茎かつ文みよりより給とてあれば。出ぬ

さそ。出る中にて。まつり。法師を召まいり

さへさせ給てやうやくまいられぬへ出

孟 誓也

つり給ての文も。いときよげそこそ。

き給うくある所のかりくたりどもをさしよこ

人々のみすくて。こなくうしこしまうりて

くさまよらつ。いぞらはまへ給ふといふとき

ことにすぐれてしもあらぬ
細 不悪（わろからず）なり源氏の目には
無上にもあらぬこととし
哥もよしけしかきそへ
師哥もとは漢詩に對し
て云だいめきし哥
などえらひ出給ふ 細 風
流あることをこのみ
又云 風情ぬあさの
まことしからぬ哥をえ
ら出まるなるへし
ことにかうがる 細 哥とえ
いへり但叙暮の御詞よ
人まずくあかれ 非也

あしくせついまだよこどりもなくはしきさま
でやふまつしころのしどけなきもおほりは
くさうしどもつくりくはへてへうしひもなど
の流さうしとをそへてけいめん
ぶりやうぶくはらんぜられじはやくぐ
あしでをしうくらうどくはいとそう
かでをしうへしうさかりてさまするの人
まどこもしとさうしめさせばそへるこ
とざとえりてこゝろづかひつゝ
えうしもくすみこのましくぞうさまへる
ものくはらんじかゝるさぬなやそい
わくずくそえつれさししよ筆ぞ
細 草子を新集あり 孟 源の御へ御草子を
源のこと
咲 帥宮の御詞のこと
孟 葦手のあかりけること
細 源の御あかるさ
源の早下へ孟 帥宮の

花宴 一首を二行ばかりにかく
など云々ぶひ草子の表紙の
いつはもおほえなし
うろ流布に 細 又人の詞也
宰くの中よりはじめてられる
つゝは給らと給はゞそこを
え源の御手ものへその詞
すゑうけての気あるなる
へしさてかうつれ給と
そゑるよしくらう
養曰源氏の詞ぐかうを
とへ気りげいさらくも
まつべくしそにしらく
ことなるみざくも書
紙のうつしきをりて 河 和哥なり
こ給人の涙さ人のなぐさに
河 獲麟一句涙與筆倶
白氏文集 中務集 古今 人の出
ことなるみぐきそて
は源のうつれあるか非

にほひやかさがりまさふかく
くらさへて筆の跡さりとあさんぜうふ
うるあざぶそれすふうきさまくるさうし
さとかうしまふべきそのうれいねざうでまそ
うるまほのぐんぞうしのかくのこくまそく
しさるり
こころよくさうさまへるおもくれてあそ
うしとこ給はこ脇のうそのそぐこ脇うるよ
あどくあつしさきふめるおどくいひそれやらる
らぐくあすあさうろよ妙かよろうも女ぼ
のうつしうぶらにもどりてくるしうさまする。さ
とぶくさうらし。こ給人の脇さくごぐ
ろよすゞれそふるちもそおくよおほほど
文の詞又源の御詞也 非也
源の秋の紙を撰んでとく
のをあてて源の秋の紙を撰んでとく
細 源の御紙を料紙とするを抄とく
細 源の出まする重紙
手して見合せて
かさのりのこと
雲の
高麗紙
河 薄様
細 紙の事
細 紙名也

孟 源の手跡をみる人乃感に堪ぬ涙をとゞめかぬるを此一句にこめたるなるべし 花

しどろもどろに 河 みだりなる也

てもとさだまらずたゞすさ

まじやのいさかひなきさま

しどろもどろに

筆のおきてすまぬ

抄 筆のおきてさだまらぬ也

えりかきたりへきなるべし

いきほひなるべし

ことさらめきて

細 異様なるし 孟 集中

ハ哥よも一首あるを出

きに。又こゝのかうやのいろしの。いろあひ花 孟 紙屋の紙屋院にて漉紙

やかなるに。みだれたる草の哥を。筆にまか さうハ文字のくづし

せて。みだれかき給へる。見所かぎりなし。

しどろもどろにあいぎやうづき。見まほしけれ

ば。さらにのこりどもに目も見やり給はず。

左衛門督は。ことごとしうかしこげ 孟 人々けしきハ源のかたちにうつろし

なるすぢをのみこのみて書たれど。筆の

おきてすまぬ心ちして。いたはりく

はへたるけしきなり。哥ども。ことさ

らめきて。えりかきたり。女の御は。まほにも 女房ハえりてえせざりけり

とり出給はず。斎院のなどは。ましてとう 孟 朝がほの斎院の哥ハ秘してとり出さゞりし

でたまはざりけり。あしでのさうしども

ぞ。心々にはかなうをかしき。宰相中

将のは。水のいきほひゆたかにかきなし

そゝけたるあしのおひざまなど。難波の

うらにかよひて。こなたかなたいきまじ

りて。いたうすみたる所あり。又いと

いかめしうひきかへて。文字やう。石な 孟 文字の様 文字のくづし

どのたゝずまひ。このみかき給へるひらも

あめり。目もおよばず。これはいとまいり 細 ひまの入べきなり

ぬべき物かな。とけうじめで給ふ。何ごと 河 真

も物このみし。えんがりおはするみこに 河 感スヂ日本紀

て。いといみじうめできこえ給ふ。けふは

又手の事どものたまひくらして。さまぐ〜のつぎ 河 續紙

古万葉集　細 嵯峨天皇
のみかどのおほんうたを
撰して書あつめさせ
給ふ　万葉集全部みてにあるべり
らる　花　万葉集一部
廿巻　平城天皇詔侍臣撰ス
之見古今ノ序ニ又万葉ハ
五巻一説貫之撰之一説
梨壺五人撰也　お　云イニ
とりなと文にみえ古来の
ことにつけられ

古今和哥集
延喜の代に撰られたる
集なれば哀筆もわろ
やうにかうり　躰にかなひ
うるはしく
まさにしてこれぞのよき
を入　御着　能書ハ昔
能くに行をとりて書け
王羲之が筆にも勝

とうりみぞ　そり　細
とんなこゝろをも
貫之が文にこそやさしくかなへき
器用なる女子に八雲
まじくなひしに今姫
君の御為に書きすべき
なりけり

びんそうしふ　吸　明名中
其の御ての筆のおかま
かうの万葉古今なとの
人なる名あり

よれるの御法して、こゝろにしりつるゝ
だきうにつゝつゝさゞのこうじの古事
集とえらひしをまなる四書・延喜の
こゝろしの古今和歌集とさうしのあるさ
のりことつゞそゝおなじ文のことりんの
のさのへうしにおなじ紀貫之の軸ぐんのり
らぞのひもちぐくた宿めしうそずるさ
よれるのそらどえへついゞかうさほ
させまつるにあかひらくまう
けんするようつきそね御かれこのぞの

ありゝれねしめぐく給やぐく善い
なりおはをんなどもとまし作くかましそ
なさくんうや十まりきみにはつてふより紀
とまして給へとるとゆれてなれ
まふ物語よりのひるどのいとわれ
ぐれしきらんのえこよりつれくいうじ
と海筆そへてなれはふとはんうぐんに
そめとしあひて世中まてりくとぼかし
上木下のんでよもさりくさりの花
くらしひてとむてうしせ給ば
はさらくれとはいゝつどけ
のわどあれり、まひつゝすくしまゝ物

の後にも日記　細　続合よハ
後に心ハの歟是こそ見ゆる
れよれも外日記あるべし

ぐらの井くいとのたいをまさ
お内大臣時々文届なく
こともあべき事なしあて
そよらかし　ハ夕霧方
ゆく届ようりて紛れけ
ぶうゆくさなくしくまか
あるし

かの八の浦道ぞ　細夕霧
くむくとてのまよひをと
ちかうか、孟夕霧より
見みよいつもどくに書
依しまつへ

一ころま　細夕霧のまぶ
よしなるよし絶ゆるを
孟夕霧のよがらもひと色
ぐうく、すこし傍とそう
るとうろも従仕の心こ
くまうしうてまる
細内大臣の御心ろさ
うちよりも吹風ひまく
みすりよかゝざ頃の心い
孟絵仕いつしと見へと
も雲井のかよ別人を
かもへ下と夕霧の心

うせなり、り門よめぐくうゝうゝれとうしう
物ぞ、人の消門中ぐくあらざさげるあ中り。
とのかもともろん中しとんぐうさ絶わ
人よま物わりもろ、ね忌どもとのへうせ
給中よ、りの上の御の日記いすゝ忌みもつゝへ
ちうしきんと物がをどいへよすゝし世とも又
しもうろんよと物がしうへしてまうとり
出給りそどうちの中じいとのれいゆそれまと人
のかへしそ中文のつとゝいうこじうら絆なく。
さうりじうしと物わりそ、姫ぎことのれは夕霧さハ
つうよとのひておうへきへうあうてゆあう、
つれぐくしくらうおりりまゝつる頃ぞいうく、

るけぎさぐさひろうよ、りの日くの内、[illegible]
いうしやうるよ、あうくうろそれ。べうそろよく
ゝうとゝおくんもひとわうくわれよ人のわん
比ありしうこうでよ、みがびさあうりうぶふぎ、
ひくちれども見んしあうけうそ一ころまゝつぎと
もえ物やをて顔そうで、くずうしいつてゝうる
まうれるしきてよ、雲居のこうろうて見へ
どろそうしつゝなうしけうらわろとうしとそへ
いうれうくすそあらしきのかせ、みすうるや
そぶ雨のこゝろいつつのべくも物わしどうろわ
つりしうとうわれかくさぬうりかうけれどいあさ
ましうろうてしろうしけめのこゝろよ、ぬるよ

ゆめうつつのさま　孟 源氏
の夕顔に對して書る
宝蔵のさまとのおなし

なにのまへりしさまとも
へ 細 源をおもひたまへる
なけく桐壺の御門の御
歎訓によもなにのよまへ
御ひがくれしとあり
みなとしへてこそ　孟 桐帝
の御事をも時ハ当つ
と今おもひあはすら
ひそかにうつりし御事
よりきん人のかたしめね
かんし

今まで見来ぬる人の
よのつねならでみこしんのはんなかりけれど、細 源氏
いかやしくいとらうたく侍りしと　地なり
夕顔の御源をとおもふ心
細 表外居のこゝろ
なやみてかのあたりのことも思ひしりぬべき
細 前栽箱不見
女の御心が中務のあたりの御心に
夕顔をおもふのこゝろ
ちを給ふとていつくもおもひさだめず
夕顔のこゝろ
とのまへど、地とわかれし給ひぞりしまゝ
孟 古詞より源の夕顔に
こうさ給ふらくいかゞ思ひ給ふらむのなに
訓し
いしらされなしつまじけに思ふらへも
詞とかせてこゝろえなくも
地なれしさひしるに、いまとおもふなれども
今おもひあはするよしかれなれなきへて
夕顔の今独するにそのまゝと
さきあしくはかりされつまひてとりあそれ
じ、なふかしからこの世のへとよそらん

ちふなかりしや　或抄 あるハ当時の弁　全言　かつかし
なにかもわきてくるふなり
きこちりぺよ　紙　孟　源よしぺるとも
あかむらかにうつし色とき
ししく又お扇のかへ
きつり
いえしらおもひのほのみたふ
みしも　お高まよみをとは
いどもきもなさるなる
とと

しかねかくて　細 後位有
経たわかりしとてのる
ら御家なりとし孟位凌

じ、ならふかしらことのひとつよとりへつ
と、ゆくそのひとつかたみにかへりて　細よみかれてこゝろえなきもこゝろありけるこ
ことによあるらひくるすゑのゝいとも
へまちきこしそや、いかしひぺよ
どもうとやうれば、限ありもうしき
しきんつかうか、いかけかくれ
ちかはひ出もくなとよもれかれ
くいそのとしの中ちもあり
細 源の讃居のこと
くしさそなりにやとよりもつかまし
なともきくさきことにもなひて
しなめくれさらてなおさく何となく

よそ身どもろくしく
かくろみとし
女のしとふさく
細 氏族諸勝の頌之を
つへへし源海よみくらり
為人八女のうちそし為く
白ら能よくく心をつけ
よくのんよ源氏物語
ども十四帖よりくく
書もみくるし
河 寛平遺誡よ見る
此平 見在書女書有忝
矣とあり。おまよ往を見
よ派しぞ。女の道てよみ
ぞろくとめし幸締と
らかやまり 細 条通抄
えら人と中そくれる
うろろくれどもしとし
師 竹末ゆもくの品業に
ろくふくえそめあまり
えら人のるうるくし
りしいやきくて世中のこ
師 女のゆやのうけ

の積しらしけんのまくかうかうまもいるまじ
りのまことなるをとのつりとらかれども
晩 一人まなすひとまする所をあきもくし
ひきげむべきくさりいるべき。女のくと
かくゐんりしこき人。菅もこぶらかわ
紫式部六条の御息所なとのることもあれ
しろんをけるきろ事しとまこころつと
てのうふや
つけてんの名ともまそこつくしも限を
孟 菩提そのるあるべし
ゆふるん。法るのわづしとろりけるとも
孟 謀悪しぐくにもおもひくせりとし
あやまりつくるんのわづらくろよろるき
ぞきのぐんしとうくきふしあらしも柏忠
孟 親のあるそろよ世にとし
細 釈のまあとこそ
ひんどんろとおもしひてりしいみやのなり
ゆぐりいへにゆやるくて世中うく聞り
りうよしもんへじしうろらしくるみどわん

よろ川よまりるうるさやう
をしんどいもらし人くし
まどのさ後をとらわかし
て見あらへし
今くられると 河 芦根き
やくさいゝへもつれまされ
ドかりえすゞて世の人を
女うかゞしそう 細 門云
もく付へ里とせ兼
くろ今そくにもかすこ

細 一くたにとし
師 自他のこゝやようしんぶつひを演くもべしとのゝし
人ともいはれしと人くさりまいましとそしてもこそ
まん秘わんのしまあつまるまくうべきさん
そふくあるべきさまどのどやうまつ道く
細 夕顔のへを秘かく雲井居のるまを云ひ様まうづくし
うちおりへりしころつづりひきのこと
へまふりやうしわうれいまよつらそてされ
かれそも須が顔のんをさるひろうい義
細 雲井居の心
よんやりるしもどゆかしまふ女もつねより
細 内大臣と見えき雲居のこと交大臣の歎きままうし
こしよ。ゆゝじのおもひきけさまつる御気色よ
ちづりしうきき身とおもしとがけめども、人
夕霧より
いつ道るゝゆかりようへくなすであるもくし給。
御文いとひあまり給めりしく義よんなりし
晩 雲井居の心
さ顔よこえて給。面がまよくしとかい

もとつきれいさのきさん。
わらく夕霧の文をとり
まふとも呉給とは云ひ
ながらさるうでハなうず
まことをさのむべきぞ
かし
しうれさら人ハこそ
咲 夕霧の文ならじとも
雲井居のかくこすりた
のし給しぼよ表なり
給なり

中務が文　細 おたにかりし
中務が文夕霧をとひこよ
らうんとかるし。孟 女
と夕霧へしへ源へ内へけ
しきぞらしまふを殺任の
みててやをりずなひ給へ
ゆくどのくちられすひしよ
孟 源の口入ありふときう
であれ此所よてにわさ
ことよ別とよげる　よろし

ながらよるれさら人ハこそあれかしよ人の
うらみをもらさぬふなれ。表とも給ふつし世にか
くり。中務のなるるん。大殿かもれそしこ給
ハりてさすやと地がしうくるうとハへ
のゆのし。夕れハ地とぞいひきらへしれしゆふさ
孟 内大臣の居人のかって　師 ちのみとのくて
ざりくし。西びくさりししとそらし
冬つとまでも
情あさき人のれんみもありけられ地とどの
くらられすひしよさろねりうさてひさ
さざれまふるくしくるくるひらそてこと
夕霧と文をひきてけとし
ひとまし人かすらもりとさて。源をうけ
雲の居のこと　細 内大臣姫君へ
てのまへハ姫君ハうもろうしきみもぞこ
くうとる源のこはらりれハからしさるく

やそとしらくみなの給
師 雲井居の心表らく
なひわすき給くよこ
とつて面白とらく

つまなさハ　細 雲井の居
のつれなさハよのつらいよ
わら侍ごくつまなきを
家もたまどとらひ来
よはりんがうさハ私身の
どうるう数又とすこまで
さらとし
氣文字すも　細 くこまや
かうなり文よ此中務の文

そしさ　細 内大臣のかくしてもいふさうとも
るつるらうしげさくらうらうし。
うおとあしらすとやもとくこいぞくしこさ
あるは給よ雲井居の給のかて
としまりるみどゆがしえされて。孟 殺任の立て源
うお給も。やがくくらしらうるみがお給。細 かくらとも
かる源とも孟 雲井居の心かたて
らくなとられくことととうへつゝ源られ。
いるあしつんなのどしろけよとひる。
細 夕霧よりの文を
さまんるあどうよれおとおりふさすまぞこ
おつてくこ地うくらうきたに
文をみるとを
あまこ源やうふく
夕
つまなきハうき世のつゆよるすりりを
おれなんやひとよてくるうどおりり。寄る文で
雲居の心で
うりとなとそめなつまなさよりしとひつけ
ことなる居ら言ふぬかとし
あふいらうなれど

の方より舞元まへき
書と落とてだゝ分の法のしまふ
ごさと術もさらう乃
方と分の外し給へぶ分
あやしきこゝろすとし
つゝりとて志がゝきと
細 夕顔とし世の人の方ゝや
といふ人も 抄 忘れぬ人や
今ましるゝとかれども、

実ね
うきりしてわそれどこゝろとこゝろよしこ
やせよるびくふるゝしんしとおかし、あや
しとうらもとられもくこふさつこの夜
細 巻くの終の句皆りくのこと
つゝとぞ

しるべへ出ひらくり多ふと云けハ人々てまゐらるハあし、さき世の人と同しうすりと云元
益こゝや世よるびくとハ我をハ忘れ多ふすじさま中務の法むをめよ人をとらるゝは
世よるびく人すとし
とあるとおやしと 細 氏経までハ名ての熟ノ返るすハゐゝりしとらゝるゝすしやと云
夕顔の人よ不審あるし 師 夕顔の人がくりるさまにいるゝすきうくいへるすや
と此かにもし